

広田和子 精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

## 隣組長体験記

昨年4月1日から今年3月末まで、私は横浜市南区六ツ川1丁目2班13組の組長を務めた。引っ越しして間もなかったのに、隣組の人たちがどのような考えを持っているのかわからなかった。しかし、精神障害者としてカミングアウトしながら生活している私が、組長をやらないのは、特別視してくださいといっていることになってしまうので、やってみようと思って引き受けた。

ところが、これかとてもおもしろいというか、大変な体験になった。組長の仕事はまず組長会議からデビューする。会議開始時間は午前10時30分。場所は自宅から徒歩3分のところにある町内会館。

そこで私は考えた。私の起床時間はだいたい11時30分頃である。組長会議に間に合わせるため、いつもより就寝を早くのんで会議に最初から参加するか？ 普段どおり薬をのんでマイペースで起きて遅刻して会議に参加するか？

私は後者を選んだ。隣組の人たちは私が起きられないことを知らないが、前から同じ生活圏に10年以上住んでいるので、「六ツ川交番のお巡りさん」や、商店の人たちは私が起きられないことを知っている。

それが私の生活のしづかさ(生活障害)なのだから。精神障害者としての。会議の日、私はいつもどおり、11時30分ぐらいに目が覚めた。さっと身支度して町内会館へ。

会館の戸を開けながら私は「おはようございます！ 精神科の薬をたくさん飲んでいますので今起きました。遅れて申し訳ありませ

ん！」と大声で言った。会議に参加していた新しい組長さんがいっせいに後ろを向いて私を見たので、私は「どうもすみません！」と言って中に入って、座ったら会議が再開した。こうして私の組長体験がスタートした。

そして、その日預かった帳面を元に町内会費の集金をしようと思っ、近所の人に「会費をめんどうなので1年分払ってもらおうと思っ」と話したら、隣組の人たちが「冗談じゃない、1年分払ったあと死んだらどうなるのよ」と怒っていることを知らされた。

だから私は、毎月集金するほうがいいのかと思っ隣組を回り始めたら「1か月ごとじゃなくていいのよ。半年分払うわよ」とけるっとしている人も多い。そしてアパートの住民さんは「ほら、一軒家に住んでいるわけでもないし、いっぺんに4800円(400×12)はちょっと負担なのよね」と本音を語っていた。

秋に入って横浜市交通災害保険申込用紙が割りあてられたので、回覧板につけて、「保険に入られる方は電話ください」と私の電話番号をいっしょに書いて回した。

すると今度は近所の人から「みんなが怒っているわよ！ 電話をかけさせようとしているって。私だって一軒一軒まわったのに！」とお叱りの電話が入った。私は「どうもありがとうございます。一軒ずつまわります」と答えて受話器を置いて、思わず笑ってしまった。けなげというか、みんなで大変さを引き継いでいるというか、ワイドショー的というか、こっけいというか。こんなことが重なって、私は隣組の人たちと何度となく会話をするなか

で、愛すべき善良な住民だと感じた。

この他に組長の仕事として毎月、県のため、広報よこはま等をセットにして一軒ずつポストに入れて歩く。その時も私は声をかけて入れるようにした。すると、隣組の人たちのなかで大変な病気をした人の闘病記についても話してもらって、私が「そうでしたか、私のまわりの精神障害者も苦しんでいる人がたくさんいますが、大変なのは私たちだけではないですね」というと、「そうよ、世の中には大変な人がいっぱいいるのよ」「がんばって」と激励された。



※コミュニティショットは今回が最終回になります。次号から広田さんの新連載「精神障害者からみた人々」が始まります。